

イギリス文学史とL・M・モンゴメリ —「書く女性」の物語—

山田美穂子

〔キーワード〕 二十世紀初頭イギリス文学, 小説, L・M・モンゴメリ, ヴァージニア・ウルフ, 女子教育

はじめに

これまでL・M・モンゴメリ (Lucy Maude Montgomery, 1874-1942) について語ることは比較的やさしかったといえるだろう。『赤毛のアン』という代表作で児童文学の世界に不動の地位を築いたカナダの女性作家, という説明で誰もが納得していたからである。二十世紀初頭の英米文学の文壇では子ども向け, 大人向けといった区別がとくになされていなかったこともあり, モンゴメリの作品はマーク・トウェインといった大御所からも「ルイス・キャロルのアリス以来の, 忘れ難い子どものキャラクターを生みだした」と絶賛された。けれども今日の読者にとっては, ことはもうすこし複雑である。モンゴメリの私的な日記が公開された1980年代以降, 伝記的な研究がさかんになり, カナダ人であり女性であるという周縁的な存在ゆえのさまざまな問題を抱えた作家モンゴメリ, という新しい作家像が立ち現われてきた。そのような重層的な作家モンゴメリを十九世紀末から二十世紀初頭のイギリス文学史の流れのなかに置いて, あらためて考えてみたい。

1. 『赤毛のアン』(1908) の背景

1-1 歴史的背景

まず, モンゴメリの作家としての地位を不動にしたデビュー作『赤毛のアン』(原題: *Anne of Green Gables* [緑の切妻屋根のアン]) が出現する歴史的背景を見ておこう。本作品の歴史の設定はカナダ建国 (イギリス植民地から自治領へと格上げされた) 直後となっている。ちなみにカナダと日本は, 近代的国家として同年に独立という不思議な縁を持っている。1867年, カナダは自治領化すなわち独立を採択した。日本では大政奉還, すなわち近代化の始まりの年である。1873年, プリンス・エドワード島 (Prince Edward Island, 以降PEIと略) が自治領に参加し, 翌1874年, モンゴメリがそのPEIに生まれた。1885年, 作品中では十一歳のアンがPEIの小さな村, アヴォンリーに到着する。

以上, 主人公の少女アンとモンゴメリの生育環境や年齢がほぼ同じ歳設定であること, 作品中にカナダの歴史的出来事が背景としてしばしば言及されることなどから, 従来この作品は半自伝的なものとみなされてきた。PEIは東京都の2.6倍の広さの島で, 当時の人口は九万人程度であった。島内には教員養成大学を擁し, 教育制度, 自治会活動, 教会婦人組織が整い, 衛

生・医療の知識もゆきわたっている。作品内で言及される小中学校で習う科目の一覧を見ると、読み方、書き取り、つづり方、作文、地理、歴史、代数、幾何、英文学、ラテン語、フランス語、体操、自然観察、と、西洋の伝統に科学的改良を加えた充実したカリキュラムである。また娯楽、政策討論会、料理・デザート、ファッションもあり、近代的な市民生活の基本ができあがっていることがわかる。これがおおまかなモンゴメリ十代の時代背景と考えてよい。

この時代のカナダの政治的状況は、自由党（親アメリカ）と保守党（親イギリス）の対立と激しい政権争いが特徴的で、二十年間で十二内閣が交替した。十九世紀末から二十世紀初頭にかけて英米で台頭した社会問題はカナダへと波及し、禁酒法、女性参政権、貿易と関税などの諸問題に対しそれぞれの党は特色のある政策で対抗した。作品中でも主人公アンを養育するクスバート家の兄妹（保守党）とかれらの親友のリンド夫人（自由党）はなにかと論争する。マリラが自家製造して隠していたワインをアンが間違っても同士で飲んでしまい、村の保守派の顰蹙を買う有名なエピソードの背景にも、当時アメリカ本土で盛んだった禁酒法をめぐる村民間の意見の相違が根底にあり、今日読めば一層モンゴメリの風俗描写の正確さとユーモア感覚があらかになる。

1-2 宗教的背景

次に作品の宗教的な背景を見てみよう。多くの日本人の読者にはなじみのうすい宗教であるために看過されがちであるが、『赤毛のアン』はきわめてキリスト教色の濃い文学作品である。そしてキリスト教のなかでも長老派（Presbyterian）の信者であるクスバート兄妹の生活が強調されている。彼らは毎週日曜日には教会に通い、安息日の決まりを堅く守る。日曜日には労働と娯楽を禁じられ、神への感謝と内省で過さねばならない。たとえば1981年のイギリス映画『炎のランナー』（原題 *Chariots of Fire*）で紹介されるエピソードによれば、1924年のパリ・オリンピックの短距離競走において有力優勝候補選手だったスコットランド人エリック・リデルは日曜日の決勝をボイコットし関係者を困惑させた。彼は教義に厳格なスコットランド長老派教会の牧師でもあったのである。

長老派とはキリスト教のプロテスタントの一派で、1560年にスコットランドの国教として採択された。教義としてはカトリックの教皇を否定し、教会員から選ばれた長老が合議して教会の運営を行うのが特徴で、主にスコットランドと北米のスコットランド系住民のあいだに広まっている。『赤毛のアン』の世界で長老派が主流なのは、PEIにはスコットランド系移民が多いためである。1890年の時点で、PEIの宗教人口の構成は長老派が三万人、英国国教会が五千人、カトリックは不明であるが、同時期カナダ本土では英国国教会が主流である（松本、47）。ときおり作品中に長老派のライバルとして登場するカナダ・メソジスト教会はまだ新しくニューファウンドランドで生まれたばかりで、ノヴァスコシャを経てPEIに到達したところであった（モンゴメリ、『虹の谷のアン』、23-24）。

他の同時代の児童文学と比較すると、この作品には宗教教育、信仰、あるいは教会のありかたについての記述がかなり多い。ことに習慣化し形骸化したキリスト教に疑問を抱き、牧師を

も臆せず批判して顰蹙を買うアンにはモンゴメリーの真意が反映されていると考えてよい。このようにキリスト教的な雰囲気の色濃い理由として、『赤毛のアン』を書いていたころモンゴメリーは長老派教会の牧師と交際、婚約していたことが挙げられる。またモンゴメリー自身も次の個人史で見ると長老派であるスコットランド系の名家に生まれ、養い親である祖母から厳しい体罰による道德教育を受けた。勤勉と正直を推奨するプロテスタントのなかでも、長老派のモットーは「簡素、清楚、質素」と容赦ない。社会学的な議論のなかではキリスト教の各宗派と社会階級が関連づけられることがあり、イギリスでは長老派は弁護士・医師・大学教授などのインテリを輩出する傾向があり、聖公会には富裕層が多く、メソジストやバプテリストには庶民が多い、といった具合である。長老派の家庭では幼いころから職業的使命感を植えつける傾向があり、アンを論じるにあたりジェンダー論の視点を強く打ち出した小倉千加子によれば、モンゴメリー自身の勤勉さへの志向は学業上の勤勉さ、学校での成績の良さに現れており、主人公の少女アンが教師になろうと志すのも養父マッシュウが熱心な長老派であったことと無関係とは考えられないとキリスト教関係者から指摘されているという。

もう一つの興味深い話題として、『赤毛のアン』に海外伝道宣教師の話題が頻出する点がある。たとえばアンは「わたしはきれいなじゃないから、結婚してくれるのは海外伝道宣教師だけでしょうね」などと養親マリラにあっけらかんと話すのだが、その話題がアンや彼女をとりまく田舎の村の人々の口にのぼる理由は明快で、当時キリスト教各宗派がアジア・アフリカへの布教活動を熱心に展開していたためである。その活動は草の根的支援活動となってアヴォンリーのような小さな村にも浸透し、その結果マリラやリンド夫人は頻繁に海外伝道の後援会に出かけて家を空け、アンたち少女に家事を任せるのである。

日本にも同時期、すなわち明治初期に北米から多くの宣教師がおとずれ、布教と同時に一般民衆を対象とした学校をひらき、現在的女子教育の礎を築いた。当時の日本の女学校のカリキュラムを見ると、さきに述べたモンゴメリーの時代の学校の学科科目と共通している。そこでは近代的な教育、とくに科学の知識にもとづいた家政の知識が重んじられていた事実を読みとることができる。北米からは女性宣教師も訪れており、『赤毛のアン』を翻訳し第二次大戦後の日本に紹介した村岡花子が学んだ東洋英和、あるいはまたドーラ・スクーンメイカーが開いた女子のための私塾を源流とする本短大も、この北米女性宣教師による女子教育の系譜に属している（『青山学院女子短期大学総合文化研究所年報第二三号』（2015）掲載の拙文「明治期日本の女子教育の一例—女子学院の歩み」を参照）。

1-3 伝記的背景

この節の最後に個人史的な事実を確認しておきたい。モンゴメリーは1874年生まれ（＝米国メソジストの宣教師ドーラ・スクーンメイカーが来日し「女子小学校」を創設した年）で、PEIでは旧家のひとつの家の一人娘であった。

父方のモンゴメリー家、母方のマクニール家ともカナダ最初期のイギリス系入植者であり、代々政治家や実業家を輩出している。父方の曾祖父は州議会の議長、祖父はPEI選出の連邦上院議員で、保守党総裁にして初代カナダ首相となったジョン・アレキサンダー・マクドナルド

と親交があるなど、政治色の強い名家であった。母はモンゴメリが二歳になる前に病死、愛する父はあろうことか自由党に転向し（宗教を変えたと同じほど顰蹙をかうことであった）、モンゴメリが十三歳のとき再婚したのを契機にモンゴメリも父の家族と共にカナダ本土へ行く。しかし年若い継母と折合わず、十九歳でPEIの祖母の家へ戻った。以下、モンゴメリの残した自伝や日記の記述をもとに彼女にとって重要な出来事のあった年を抜き出し、年表風にまとめてみると以下のようになる。

- 1893年（19歳） 祖父母の世話をしながら学業を志し、PEI州都の短大に入学する。
- 1894年（20歳） PEI最年少の20歳で教員資格を獲得。
- 1895年（21歳） ノヴァスコシャ州都ハリファクスのダルハウジ大学にて英文学の講義を聴講（強調は筆者）。この大学で初めての女子が卒業したのはわずか十年前のことで、女性が教養を求めて大学へゆくことはまだ歓迎されなかった。大学ではラテン語、フランス語、ギリシャ語を学び、古代ローマ作品からシェイクスピアまで計画的な読書を遂行した。
- この間初めて作品が買い上げられる。フィラデルフィアの児童向け雑誌『ゴールデン・デイズ』から5ドル支払われ、そのお金でテニスン、バイロン、ミルトン、ロングフェロー、ウィットティアの詩集を買う。「目的地に達したという記念に、いつまでも手元に置いておくことができるものが、わたしは欲しかったのです。」（自叙伝『険しい道』より）
- 1896年（22歳） PEIに戻り教員生活（年収250ドル）のかたわら執筆と投稿を繰り返す。遠縁の従兄との婚約と破棄。宿泊先の農家の長男との恋愛と失恋。
- 1901－1902年（27－28歳） ハリファクスにて新聞社勤め。（年収240ドル）
- 1903年（28歳） 地元にて赴任してきた長老派牧師マクドナルドと出会い、結婚を意識。年収は500ドルにもなっていた。カナダで初めての自立に成功したフリーランス・ライターであった。
- 1908年（33歳） ボストンのL・C・ペイジ社から『赤毛のアン』出版、大ブーム起きる。
- 1911年（36歳） 祖母が逝去。4カ月後、牧師マクドナルドと結婚。以降、死ぬまでカナダ本土で転勤牧師館住まいであった。

2. 書く女性たち：「家庭の天使」をめぐる葛藤と憂うつ

2－1 モンゴメリの試練―職業作家と主婦との両立

「アン自身いつも言っていたように、今日は「我が人生の一大転機」でした。できたてはやほやのわたしの本が出版社から届いた。わたしは率直に告白しよう―それはわたしにとって、誇らしい、すばらしい、ぞくぞくするような一瞬であったと。物心ついてから今日までのすべての夢、希望、野心そして闘いが、いまものという形に具体化され現実化されて、わたしの手の中にあるのだ―これがわたしの生まれて初めての本なのだ。偉大な本

ではないかもしれない。でもこれはわたしのもの、わたしのもの、わたしのものなのだーわたしが創り出したものなのだ。」(『険しい道：モンゴメリー自叙伝』より)

モンゴメリーは刊行と同時に驚異のベストセラー入りを果たした『赤毛のアン』一作で、英米文壇における不動の名声を得た。カナダはもちろん、同じ英語圏であるアメリカ、イギリス、オーストラリアの新聞雑誌に六十篇を超える書評が載り、その後重版を重ね南アフリカ、ニュージーランドでも大人気となった。1914年までにオランダ語、スウェーデン語、ポーランド語にも翻訳され、無声映画、トーキー映画も制作された。ロンドンの論評誌「ザ・スペクテーター」にも書評が載った。それを見ると、当時は児童文学というより大人向けの読み物として評されている。十九世紀後半から二十世紀初頭の文学産業界には児童・大人向けの区別はあまりなく、大人もマーク・トウェインの『ハックルベリー・フィンの冒険』やケネス・グレアムの『楽しい川辺』を、むしろ失われてゆく黄金時代をノスタルジックに懐かしむように読んだのだ。たとえばイギリスのベアトリクス・ポターもこの時期に絵本『ピーター・ラビットの冒険』を出版、同じく大人の読者に好評を博し英語圏でベストセラーとなっている。アメリカ文学の大御所マーク・トウェインが主人公アンについて「(ルイス・キャロルの) アリス以来、もっとも魅力的なキャラクター」(1908年10月3日付の手紙)と激賞、イギリスの国民的作家であった『ジャングル・ブック』の作者ラドヤード・キプリングも『赤毛のアン』を評価したという。世界中からファン・レターの届く人気作家となったのである。

しかしそうであっても、生活はあまり変わらなかった。高齢化し80代になった祖母はいよいよ気難しく人づきあいを嫌い、お手伝いも雇わせなかったため、すべての家事は依然モンゴメリの仕事であった。加えて作家モンゴメリを慕って訪ねてくるPEIへの旅行者に煩わされ、また狭い村社会では商業的に大成功したモンゴメリに対する嫉妬がみられた。その祖母が亡くなると、祖父の遺言どおり住んでいた家屋と土地は叔父が相続することになり、家を出なくてはならない試練に立たされた。これは故郷PEIの自然を偏愛するモンゴメリにとっては打撃であったはずである。祖母の死から四カ月後、モンゴメリは長老派牧師ユアン・マクドナルドと結婚する。

「結局のところ、この世は実際的な世界なのですから、結婚生活にしてもその実際的なところを共にしなければなりません。ふたりにお互いを愛する気持ちがあつて、お互いに退屈にならず、年齢や社会的地位の点でまあまあうまくつり合っていれば、ふたりが共に幸せになる見込みはたっぷりあると思います。」(文通相手G.B. マクミランへの手紙、1907年婚約中に書かれたもの。強調は筆者。)

この正直な告白において、モンゴメリは「リスペクタビリティ」への執着を隠す様子もない。実際モンゴメリは多忙を義務付けられた牧師の妻としてはかなり有能であった。今で言う「ライフワークバランス」の困難な均衡を傍目には易々と保ちながら新婚旅行後はユアンが赴任した教会のあるオンタリオ州各地に移り住み、切れ目なく育児をこなしつつ牧師夫人として

活躍し、赤十字の地方支部長やカナダの文芸組織の会長などをも務めた。

当然出版社からは続編を所望され、意に反してアン・シリーズを書き続けることになったモンゴメリは、職業的な良心と当時の若い未婚の女性を縛っていた社会の因習的な道徳観との間で葛藤に苦しんだことが日記から伝わってくる。

「若い女性向けの作品には道徳を紛れ込ませなければならない…。」

子供たちをありのままに書くことはかまわないのです—ですから、子供たちを描いたわたしの本はいつも面白いわけです。でも、＜若い未婚女性＞のことを書くということになると、かわいいけれどもおもしろ味のない少女—というか、はっきり言って、比較的大きくなった子供で、その上、人生のイロハも、それに対応する姿勢も全然知らない娘—を描かねばならないのです。

「まったく一般大衆ってのは」（アメリカの資本家で鉄道建設業者コーネリアス・ヴァンダービルトの言を引用して）(…) わたし自身がそう言っているのではありません。わたしには一般の人々を非難することはできません。まだしばらくの間、その人たちの気に入るようにしなくてはならないのです。

（『モンゴメリ書簡集—G. B. マクミランへの手紙』より、1924年9月3日）

モンゴメリが少女を描くとき、因習的な「女の子らしさ」に若いヒロインを押しこめていることを自分で意識していることがわかる。一般大衆が安心して読める道徳的な少女とは「人生に対する積極的な姿勢も知性もなく、恋愛や性への関心ももっていない面白みのない娘」であるという。そのような非現実的な少女像に安心を求め、ひいては少女を抑圧する「一般大衆」を軽蔑する—すなわち「フェミニズム批評の視点をモンゴメリは自分の作品に対して持っていた（松本、177）」のである。しかし彼女は最終的に、その抑圧的な一般大衆に迎合して書く自分を認めてしまう。彼女の世間の目に対する意識、人からどう見られているかということ、すなわち「リスペクタビリティ」を重要視する態度は終生変わらなかった。

2-2 女学生に「自分ひとりの部屋」を勧めたウルフ

一方、同じ女性作家として、道徳観や社会的規範から完全に自由に創作することの困難をヴァージニア・ウルフも共有していた（小倉、『赤毛のアン』の秘密』、246-250）点に目を向けてみたい。

まず「家庭の天使」を殺害すること。そうすれば残るのは「インキ壺のある寝室の少女」。
だが少女にとって、女性にとって自分自身とは？

（ウルフ、『蛾の死』より）

ロンドンに「教育のある父親」「美人で芸術家の母」の娘として生まれたウルフはこの時代の女性としては特権的に、生計のために創作する必要のなかった作家である。二十世紀初頭の知的雰囲気を形成するのにおおきく関わった、「ブルームズベリ・グループ」として知られる前衛的な自由主義的思想をもつケンブリッジ出身の友人たちとの交際に知的刺激を受け、夫の経営する出版社から採算を度外視して凝った本を出すことができ、ひとつの作品の完成に五年もかけることが出来た。思えばモンゴメリーが欲したものすべてをウルフは持っていた、と言ってもよいだろう。小倉はこの二人を指して「同時代だが異次元の住人」と表現している。

ウルフの有名な随想集『自分ひとりの部屋』(*A Room of One's Own*) (1929) は、その前年1928年10月に彼女がケンブリッジ大学の女子カレッジ、ニューナムとガートンで行った「女性と小説」についての講演をもとにまとめられた。このときのウルフの意図は若い、金銭的余裕のない女性学生たちにエールをおくりたい、というものであった(『自分ひとりの部屋』訳者解説より)。その挑発的な内容は多くの女子学生を奮い立たせたことだろう。なにしろ「貧乏を甘受するより、ワインと自分ひとりの部屋を享受すべし」(『自分ひとりの部屋』, 256) というのである。ウルフが書いた日記によれば、講演当日の聴衆である女性学生たちの印象は次のようなものであった。

お腹を空かせた、でも勇ましい女性たち——それがわたしの印象。知的で熱心だが貧乏で、みんな学校教師になる定めにある。ワインを飲んで自分ひとりの部屋を持ちなさいと、わたしは彼女たちにはっきり言ってあげた。なぜジュリアンとかフランシス [などの男子学生] には豪華で贅沢な生活がふんだんに分け与えられているのに、フェア [などのニューナムの女性学生] たち、そしてトマス [などのガートンの女子学生 (トマスは姓)] たちには何も与えられていないのか？

(『ヴァージニア・ウルフの日記』 アン・オリヴィエ・ベル編、第三巻、200)

文化的な余沢をワイン、と表現したところにウルフの審美的な傾向が見えるが、これは文章化された際には「年収五百ポンド」と置きかえられた。この女性の生活実感と思想とのコネクションを大事にする考え方は後の1960～1980年代に盛り上がった女性解放運動—第二波フェミニズム運動—が主張する「個人的なことは政治的なこと」というスローガンと親和性が強く、再評価され今日にいたっている。自己規制を働かせずにすむ空間と経済基盤の確保の重要性——これこそ女性の諸問題の根源、また社会のしくみの根幹に関わる先鋭的な卓見であった。日記にも描写されている「学校教師になる定め」にある貧しく向上心の強い女性たちは、在りし日のモンゴメリー、島内の短大を主席で卒業し最短で教員免許を取得したモンゴメリの姿に限りなく重なる。

しかし、この講演がなされ、『自分ひとりの部屋』として出版され半年で二万二千部が売れ、ウルフの他のどの作品をも凌ぐ売れ行きを見せていた(「訳者解説」, 260) そのころ、モンゴメリの方は苦難の後半生を歩んでいた。『自分ひとりの部屋』が出版されたまさにその年、1929年の世界大恐慌もモンゴメリ家の財政に大きな打撃を与えた。そうでなくともすでに結

婚後の1921年から1929年に書かれた日記の第三巻には夫ユアンの精神変調が克明に書かれている。夫のために精神病理学を学び、投薬治療を探しつつ多忙な牧師婦人の役職をこなすうち、自らも重いうつ病に侵されてゆく。それでもなお、三人の息子たちの学費稼ぎのために意に染まぬ作品の執筆をせねばならない苦渋がこの時期の日記には赤裸々に記されている。遺産相続による経済基盤に立っていたウルフの文学論・女性論に陥穽があるとすれば、この点ではないだろうか。すなわちウルフは、五百ポンドの年収を得るために働く職業的作家である女性が家庭への奉仕をもこなしつつ、思索にふけるということが可能なのか、という現実的な問題を考慮していないように見える点だ。その深刻さは男性よりも女性の原稿料がかなり低かったモンゴメリの時代においては、なおさらである。

2-3 モンゴメリとウルフの共通点と相違点

文学史的には歴然としたステータスの差があるウルフとモンゴメリを比較すると意外に興味深い発見がある。二人とも同時代人であり、母親を早くに亡くし、20代に親密な父親を亡くし、文才に恵まれ、ほぼ同じときに結婚（それぞれ1912年、1911年）、そして両者とも恒常的な強い不安と無気力に悩まされ、神経衰弱と診断を受けたのち、第二次大戦にたいして強い不安を抱き、ほぼ同時期に逝去（1941年、1942年）。1910年における二人の状況はかぎりなく似通う。この年、モンゴメリはベストセラー作家としてボストンのページ社主催の社交界に招待され、新聞社からインタビューを受けた。その際の記事から、彼女の外観から好み、当時世間の話題的であった女性参政権運動に対する意見まで興味深い事柄が読み取れる。

日本のウルフ研究者、神谷美恵子が指摘したようなウルフの統合失調症に限りなく近い性質は、モンゴメリの適応性が高く感じのよい女性、という印象とは対照的である。モンゴメリはすらりとして悲しげな風貌のウルフとは違って小柄、後年は小太り体型で、「こどもっぽい顔」と記者にかかれているが、同時に「どこか驚を連想させる」とも書かれているのが興味深い。彼女は自分自身についてはガンとしてしゃべらず、婦人参政権には「反対」で、「女性は家庭を愛する主婦になることが価値があること」と主張している。おもしろいことに、モンゴメリは書簡集のなかでも「大多数の女性は家庭にあってこそ最も幸福であり、また最良の仕事ができるのです。それは大多数の男性が実社会にあってそうであるのとまったく同様です」と書きながら同時に、

どちらにとっても例外はあります。社会的な仕事をするように生まれついた女性もいますし、レストランで料理をする男性もいます。そうです、そういう人たちもいるんです！わたしには、この問題には性別はほとんど関係ないように思われます。精神に男女の別はない、と思っています。ですから—結婚生活のみならず職業においても—個々人は彼自身の（そして彼女自身の）活動分野を見出すべしです。（下線強調は筆者による）

とも書き、論理的には矛盾しながら、ジェンダーに関する強固な保守主義と自分自身の知性へのすさまじいプライドを暴露している。つまり、自分はいわゆる「女性」集団には属していな

いと考えていることがわかる。上の引用中の「例外」とは自分のことで、文学で成功し男性なみの収入を得ている自分は、社会的には男性と同等に扱われるべきなのである。そのため、「私有財産を持つ女性は投票権を与えられるよう法整備をすべきだ」と書きもすれば、「わたしには、たきぎ割りの仕事をしてくれるフランス人たち、右手と左手の区別はつくかもしれないけれど、読み書きのできないあの人たちほどの知性も、また、国の利益のために投票する能力もないのかしら？」と書くのである。

モンゴメリーとウルフ両者の、女性のもの書きとして障害にぶつかったときの意識のありかた、とくにフェミニズムに対する態度は対照的である。先の「女性の職業」の一節にも見られるように、一般にウルフはフェミニストの旗頭と目されていたのに対し、モンゴメリーは終始フェミニズムには冷淡であった。それでいて女性として一段低い扱いを受けたと感じたときには徹底抗戦する気概もあり、ペイジ氏が長年、女性作家に男性よりも低い原稿料を出していたことに対して猛抗議（「彼は際限なく不正を働きました。たいていの女性は何事にせよ、法に訴えるよりは自ら屈してしまうものだ、と心得ていたのです」）、1919年に訴訟を起こして勝ち、九年後に千ドルを獲得する。だが不思議なことに、モンゴメリーは自分に向けられた不正が女性全体に対する辱めだとはあえて考えなかったようだ。自分は「例外的な女性」だと考えた結果、職業女性と連帯することがついに出来ず精神的な孤立に苛まれた。こう見てくるとモンゴメリーは、現在にもつづく「女性としての安泰」と「職業上のプライド」との矛盾にひきさかれた、非常に早い存在だといえるだろう。

3. モンゴメリーと「書く女性」の系譜

モンゴメリーとウルフをつなぐ具体的な交流の証拠などはないものの、モンゴメリーをイギリス文学の流れのなかに置くと、新しい角度が示されるように見える。モンゴメリーのイギリス文学への傾倒、とりわけシャーロット・ブロンテへの偏愛は日記から読み取ることが出来る。

Sunday, Jan.22, 1911

(.....) I have been re-reading the life of Charlotte Bronte by Mrs. Gaskell this week. It is a wonderful book. It is hard to decide whether its charm is due to Mrs. Gaskell's style or to the real life of Charlotte Bronte—that woman genius whose outward life was so hard and bitter and tragic. It is a dear wish of my heart to make some day a pilgrimage to Haworth and see the old house she lived in and wrote her wonderful books in....

(*The Selected Journals of L.M. Montgomery, Volume 2*, 36)

モンゴメリーはギaskell夫人によるシャーロット・ブロンテの伝記を愛読しており、「女でありながら天才」「その外的生活は厳しく悲劇的」とシャーロット・ブロンテを表現するとき、モンゴメリーは自分を重ね合わせているようにも見える。言及されているギaskell夫人は中流階級に生まれながら労働者階級の人々の暮らしと心情をよく描いた作家であり、その悲惨の中

にもユーモアをしのばせる文体をモンゴメリが評価しているのは興味深い。『赤毛のアン』シリーズ全般がユーモアにつつまれ決して悲劇的な調子に傾かないのは、おそらくモンゴメリが文体にはらう関心と関係がある。そしてウルフとの関連でいえば、『自分ひとりの部屋』の冒頭でウルフとおぼしき語り手が、〈女性と小説〉という講演を頼まれて頭に浮かぶのは…ファーニー・バーニー、ジェイン・オースティン、ブロンテ姉妹、ミス・ミットフォード、ジョージ・エリオット、それにギヤスケル夫人に触れておくかしら、と気軽な口調ながら簡潔にまとめている。これはいわばウルフの考えるフェミニズム文学史の正典であり、「英文学」の科目で優等を取り生活のために教員になったモンゴメリの境遇がシャーロット・ブロンテに、より正確にはジェイン・エアに似ていること、そしてモンゴメリがシャーロット・ブロンテを偶像視していることを考えあわせるとき、ウルフとモンゴメリが確かに同じ「書く女性」の系譜につらなっていることによる、ゆるやかな相似が見えてくる。

二十世紀初頭には、十九世紀末からの女子高等教育の果実として「書く女性」が多く現れた。彼女たちの多くが少女を主人公にした成長物語を表し、児童文学というジャンルのなかにはやがて少女小説、と呼ばれる小説群が生まれてくる。そのうち女の孤児、もしくは片親家庭の女兒の成長物語、とくにかれらが教育を受けることで重要な変貌をとげてゆく話は枚挙にいとまがない。有名なものではオルコットの『若草物語』(1868)、ジーン・ウェブスターの『おしながおじさん』(1912)、ジーン・ポーターの『リンバロストの乙女』(1909)、エリザベス・ポーターの『少女パレアナ』(1913)。近年議論が盛んになっている問題、すなわち村岡花子翻訳による『赤毛のアン』が戦後日本の親米・保守(家庭回帰・母性強調)的な文化環境の中で果たした役割については、刊行されたばかりの『終わらないフェミニズム』の中に収められた伊藤節の「『少女』の誕生と抵抗—孤児アンの物語の原作と日本における受容をめぐって」に「抵抗勢力としての少女文化」というキーワードで先行研究とあわせて詳しく述べられている。

またモンゴメリとイギリス文学の関連をもうひとつ挙げるなら、『赤毛のアン』とモダニズム作家としてのウルフの盟友、E・M・フォースターの代表作『眺めのいい部屋』(*A Room with a View*)とは同年に出版されている。両作品には皮肉っぽい文体、強い道徳観、強烈な個性の登場人物たちがおりなす日常のドラマ等共通するものが感じられ、文学史的にはまったく異なるジャンルでありながら、二十世紀初頭の時代固有の社会の様子を垣間見せる。そこでは女子教育という問題が、あるいは変容しつつあった女の子の人生における選択肢が、人々の関心の対象であったことがうかがえる。『眺めのいい部屋』には孤児こそ出てこないが、はたち前の主人公ルーシーの父親は財産を残して亡くなっている。通常、ヴィクトリア朝的因習の打破というワン・アイデアに依拠して書かれたフォースターの事実上の処女作であると評価されるこの作品も、見ようによっては「書く女性」の系譜に並べてよいかもしれない。「家庭の天使」予備軍にされたルーシーの欲求不満や進歩主義気取りの女性作家の滑稽さ、女性参政権運動をめぐる母娘同士の考え方溝を暴く小気味よい会話劇の趣があるが、最終場面では主人公は結婚し、新婚家庭で縫物をしている。微妙な後味の中編である。

一方モンゴメリーは原稿料の男女格差を暴き、長い裁判の末に勝訴したという武勇伝をもつ、まごうかたなきフェミニストの一面をもちながら、モダニズムや女性参政権運動を嫌った。だが彼女の代表作『赤毛のアン』は、とびきり独創的な少女を主人公に据えて作家が自己の創作意欲に忠実に書いた会心のデビュー作であった。登場人物の女性たちは女性参政権から国家の関税政策まで論じあい、世間の考える保守的な少女小説のイメージをくつがえす。シリーズ第五巻『アンと幸福』において、アンは遂に「書く女性」として高校の校長の座をつかむ。

後世、児童文学の代表的作家リンドグレーンは影響を受けた作品としてみずから『赤毛のアン』を挙げている。そうであれば、古今東西のこども読者を獲得してきた主人公たち—コミュニティを乱す小さな反逆者ピッピーや自分だけに向けられる愛情を求めてさまよう孤児ラムセス—にアンの後継者を見てとるのは正しい。しかし、女の孤児アンが文学史的にこれほどの重要性をもったのはなぜだろうか？それは、女子への教育が象徴的な孤児を生みだしたから、あるいは今でも生み出しつつあるからではないだろうか。女子教育が社会にあまり好意的に受容されなかった時代や社会においては、教育を受けた女子はその親と物理的・精神的・知的に乖離してゆき、象徴的な孤児性を帯びざるを得ない。男の孤児ならばマーク・トウェインの創作したハックルベリー・フィンのように新生国家をになう理想的な人材となれたが、女の孤児では事情が違った。高等教育を受けた結果獲得した知識と教養によって少女は、社会的通念・因習的道德観から自立できたかもしれないが、家族・社会からは孤立した。その孤児性と引き換えに、彼女らは「自分ひとりの部屋と年収五百ポンド」、運が良ければワインを手にしたのである。

終わりに

百年前のカナダ人女性作家モンゴメリーの人生を通して私たちは「書く女性」であることの苦しみを知り、同時に「わたしのもの」を手の中につつま、希望や野心が形になることの強烈な快感をも知るだろう。本学の同僚、梅垣千尋の著書『女性の権利を擁護する—メアリ・ウルストンクラフトの挑戦』のなかに、モンゴメリーが自問自答したものと同じような問答がある。「地上を飾り立てる微笑む花」のような存在になることが女性の最大の徳、というルソーの主張に対して十八世紀の女性思想家ウルストンクラフトが放つことば—「徳」は男女の関係なく「荒々しい労苦によって、世俗の苦勞との有益な闘いによって得られなければならない」—を読むとき、その百年後、二百年後にもなお女性が書くことにまつわる困難が解決していないことを思う。かつて女子教育とは、この社会を生き抜く実践的知を教えると同時に、ことばを発する、すなわちこの世界に存在することの誇りと喜びを教えるものであった。そして今日のわたしたちもまた、この課題を同じ誇りと喜びをもって引き受けている。

<参考文献>

ウェブスター、ジーン『あしながおじさん』、新潮社、1954.

梅垣千尋『女性の権利を擁護する—メアリ・ウルストンクラフトの挑戦』、白澤社、2011.

- ウルフ, ヴァージニア『自分ひとりの部屋』, 片山亜紀訳, 平凡社, 2015.
- 『新装版レズビアン短編小説集：女たちの時間』, 利根川真紀訳, 平凡社, 2015.
- 小倉千加子『「赤毛のアン」の秘密』(1991～1993年『イマージョ』連載), 新潮社, 2004.
- 小平麻衣子『夢見る教養一文系女性のための知的生き方史』, 河出書房新社, 2016.
- 桂宥子, 白井澄子編著『もっと知りたい名作の世界 10・赤毛のアン』, ミネルヴァ書房, 2008.
- 日本ヴァージニア・ウルフ協会, 河野真太郎他編『終わらないフェミニズム―「働く」女たちの言葉と欲望―』, 研究社, 2016.
- ポーター, エレノア『少女バレーナ』, 角川書店, 1986.
- ポーター, ジーン『リンバロストの乙女』(上・下), 角川書店, 1990.
- 松永典子「フェミニズムの戸惑い―第二波フェミニズム前後の「働く」女の「自伝」, 『終わらないフェミニズム』所収, 研究社, 2016.
- 松本侑子『誰も知らない「赤毛のアン」背景を探る』, 集英社, 2000.
- 松本侑子『赤毛のアンへの旅：秘められた愛と謎』, NHK 出版, 2008.
- モンゴメリ, L・M・『虹の谷のアン』, 村岡花子訳, 新潮社, 2008.
- 同上『炉辺荘のアン』, 村岡花子訳, 新潮社, 2008.
- 同上『エミリーの求めるもの』, 村岡花子訳, 新潮社1969；再版2007.
- 同上『青い城』, 角川グループパブリッシング, 2009.
- ラヴェラ, グウェン『ダーウィン家の人々：ケンブリッジの思い出』, 岩波文庫, 1952；再版2012.
- Forster, E. M. *A Room with a View*. Edward Arnold, 1908; Penguin Classics, 2000.
- McCord, Norman and Purdue, Bill. *British History 1815-1914*. Oxford University Press, 2007.
- Rubio, Mary and Waterston, Elizabeth eds. *The Selected Journals of L.M. Montgomery. Volume 2: 1910-1921*. Ontario; Oxford University Press, 1987.
- , *The Selected Journals of L.M. Montgomery. Volume 3: 1921-1929*. Ontario; Oxford University Press, 1992.
- Webster, Jean. *Daddy-Long-Legs and Dear Enemy*. Showalter, Elaine ed. Penguin Classics, 2004.
- Woolf, Virginia. *A Room of One's Own*. Hogarth Press, 1929.

L.M. Montgomery and Early 20th Century English Literature: Genealogy of Writing Women

ISHIDA-YAMADA Mihoko

Talking about L.M. Montgomery—the author of *Anne of Green Gables*—used to be a fairly simple affair until it saw the rush of publishing of her personal journals and research in books based on them around the mid-1980s. Now Montgomery has turned out to be a self-inflicting martyr of the conservative Patriarchs that dominated Canadian Christian society in the early 20th century.

By comparing her with another contemporary female author, Virginia Woolf, the author describes the similarities and differences between them in respect to their attitudes towards writing as a professional, feminism, and their inter-textual connections in the context of early 20th century English Literature.

Key Words : early 20th century English literature, novel, L.M. Montgomery, Virginia Woolf, education for girls
